

解答は別紙の解答欄に記入しなさい。

I 以下の文章を読み、空欄（ A ）～（ J ）に最も適切な語句を記入し、下線部（1）～（5）に関する各設問に答えなさい。

近代の交通・通信分野における数々の技術革新の中で、1807年に実用化された蒸気船は西欧列強とその植民地をこれまで以上に深く結びつけた最初の技術革新だった。その燃料となる石炭の良質な産地を国内外に数多く抱え、優れた鉄鋼・造船技術を有したイギリスは、その恩恵を最も享受した国家といえよう。インドとの連絡を例にとれば、1830年代末に東インド会社の海軍によりインド西岸のボンベイ（現ムンバイ）と紅海沿岸のスエズの上に蒸気船航路が開設されたのを皮切りに、蒸気船は1840年代前半にはイギリス本国と地中海沿岸のアレクサンドリアを結び、スエズと（ A ）川の河口に位置する港市カルカッタ（現コルカタ）を結んだ。これにより、蒸気船が導入される以前に片道およそ1年を要したインドとの連絡は、片道わずか6週間に短縮された。上記の航路に就航した最初の民間会社ペニンスラー・オリエンタル汽船運航会社（略称 P&O）は、1845年には⁽¹⁾ペナン、シンガポール、さらに（ B ）条約によりイギリスに割譲されて間もない香港島へと至る定期便航路に蒸気船を就航させた。この流れは、スクリュー・プロペラなど蒸気船の性能を向上させる数々の発明に加え、アレクサンドリアとスエズを結ぶ鉄道の敷設や地中海と紅海を結ぶスエズ運河の開通によりさらに加速することになる。イギリスは世界各地との連絡に蒸気船を利用するだけにとどまらず、海運業・造船業における覇権をも握り、莫大な利益をあげた。20世紀初頭、世界の主要な定期船会社が保有する船舶数の6割弱がイギリス企業の所有だったほか、19世紀末からおよそ四半世紀の間に建造された金属製船体を有する蒸気船の3分の2がイギリス製だった。

蒸気船がイギリスとインドを結びつけた頃、原材料の供給をアメリカに依存する現状を危惧したランカシャーの綿工業者の支持などを背景に、インドでは沿岸部の港市と内陸部にある世界有数の綿花の産地を鉄道で結ぶ試みが始まろうとしていた。また、東インド鉄道会社がカルカッタの対岸ハウラを起点に敷設した鉄道が1855年に炭鉱のあるラーニーガンジへと延伸されたように、鉄道の敷設はイギリスとインドを結ぶ蒸気船の円滑な運航にも重要な意味を持った。1857年に起きた⁽²⁾インド大反乱の鎮圧に鉄道が大きな役割を果たした結果、その建設はさらに加速し、1871年にはボンベイなど4つの主要都市が鉄道で相互に結ばれた。鉄道の建設・運営主体の多くは、国王の代理人として（ C ）とも呼ばれたインド総督を長とするインド政庁、あるいは民間の鉄道会社だったが、インドに大小あわせ600ほど存在した藩王国が関わった例も見られた。20世紀初頭、インドの鉄道の総延長は4万キロを超えたが、これは他のアジア諸国の総計を上回る。しかし、建設のための資金・技術・資材のほぼ全てがイギリスから調達・輸入されたため、鉄道建設自体がインド社会の発展に貢献することはほとんどなかった。

19世紀半ばに陸上電信と海底電信が相次いで実用化されたことにより、情報伝達速度のさらなる向上が可能となった。インド大反乱の経験を通じ、インドとの連絡をこれまで以上に密にする必要性を

強く認識したイギリスは、インドとの間に電信を敷設する事業に着手する。1865年までにイギリス政府は、⁽³⁾自身あるいは自国の電信会社が敷設した電信線を諸外国が敷設した陸上電信線に接続させることによりインドとの通信を実現したが、1870年にイギリスの電信会社により海底電信主体の電信線がインドとの間に敷設されると、他国が敷設した陸上電信線に対する政治的・技術的な不信もあり、以後は海底電信がイギリスとインドを結ぶ主要な情報伝達手段となった。1890年代には、ロンドンとボンベイの間を結ぶ海底電信ケーブルが電報を届けるのに要する時間はわずか35分に短縮された。

1830年以降フランスによる植民地化が進んだアルジェリアとフランス本土を結ぶ海底電信が1870年にイギリスの電信会社により敷設されたように、海底電信の分野におけるイギリスの技術的優位は19世紀末には抜きがたいものとなっていた。当時、世界中に敷設された海底電信ケーブルの実に7割近くがイギリス政府あるいはイギリスの民間企業により所有されていた。このことは、ベルリン会議以降に加速したアフリカ分割におけるイギリスの立場を有利なものとした。アラビア語で「神に導かれた者」を意味する（ D ）を称したムハンマド＝アフマドがスーダンに建国した国家を1898年に瓦解させた直後、イギリスはフランスとの間に⁽⁴⁾ファショダ事件を引き起こしたが、ナイル川流域に自前の電信を敷設していたイギリスは、対峙するフランス部隊が苦境に陥っていると虚偽の情報を流すことにより情報戦を制し、フランス政府に部隊撤収の判断を下させた。また、イギリスがブール人と呼んだ（ E ）が1852年に建国した（ F ）内の金鉱をめぐる対立などを引き金に南アフリカ戦争が勃発すると、イギリスは南アフリカとヨーロッパを結ぶ海底電信ケーブル経由の通信に対する検閲を課した。

インドの場合と同様に、鉄道はイギリスのアフリカ進出と深く結びついていた。ウィーン会議によりイギリス領となったケープ植民地をはじめとする南アフリカでは、同地にダイヤモンドや金の鉱脈が相次いで発見された1870年代から80年代に鉄道の敷設が活発に行われた。その後、イギリスは対立する北のブール人国家の動きを封じ込めるべく現在のボツワナ共和国にあたるベチュアナランドや1895年に（ G ）と命名された現在のジンバブエ共和国とザンビア共和国にあたる地域などを支配下に置き、同地に鉄道を延伸させる計画を進めた。1890年代におけるアフリカ内陸部への鉄道の延伸は、当時のケープ植民地政府首相が夢想したアフリカ縦断鉄道計画の一部をなすものであったが、疫病の流行による駄獣の激減と1899年の（ G ）北部やベルギー王が私有する⁽⁵⁾コンゴ自由国南部における銅鉱脈の発見がこの動きをさらに推し進めることになる。1910年には鉄道が（ G ）やコンゴ自由国南部を南アフリカと結び、同地で採掘された鉱石を南の積み出し港へと運んだ。1890年代半ばには、現在のケニア最大の港市であり、14世紀にイブン＝バットゥータが訪れたことでも知られる（ H ）を起点に内陸部へと延びるウガンダ鉄道の敷設が始まっており、イギリスの支配下にあった他のアフリカ諸地域における鉄道建設もさかに行われた。しかし、イギリスをはじめとする西欧列強がアフリカに敷設した鉄道は、内陸部で産出される商品作物や鉱物資源などをヨーロッパに輸出することを主目的としており、その他の用途には非効率な構造を有していた。

19世紀を通じて維持された交通・通信の両分野におけるイギリスの圧倒的優位は、20世紀に入ると次第に揺らぐことになる。1895年に（ I ）が開発した無線電信の登場は、イギリスがその多くを

保有する海底電信ケーブルに依存しない新たな情報伝達手段をイギリスの競合国に与えた。さらに、船舶をはじめとする交通機関の燃料に石油が用いられるようになると、燃料供給におけるイギリスの独占的地位も低下した。一方、アメリカ合衆国では後に反トラスト法の標的となるスタンダード石油会社を1870年に設立した（ J ）などの力で、石油精製業が急速に発展した。同国は無線通信への移行という技術革新にもいち早く適応し、戦間期の国際社会における優位を次第に高めていくことになる。

設問（1）下線部（1）の両島とマラッカからなり、1826年に成立したイギリスの植民地の名称を記しなさい。

設問（2）下線部（2）に関連して、反乱側が擁立したムガル皇帝の名前を記しなさい。

設問（3）下線部（3）に関連して、19世紀半ば、イギリスは当時イランを支配した王朝から陸上電信線の敷設権を取得したが、この王朝の名称を記しなさい。

設問（4）下線部（4）の事件が起きたファショダ（現コドク）は現在、2011年に新たに独立した国の領土となっている。この国の正式名称を記しなさい。

設問（5）下線部（5）の地域は、銅をはじめとする豊富な鉱物資源を抱え、その分離独立宣言がコンゴ動乱（1960～65年）のきっかけともなった。この地域の名称を記しなさい。

Ⅱ 以下の文章を読み、空欄（ A ）～（ J ）に最も適切な語句を記入し、下線部（1）～（5）に関する各設問に答えなさい。

かつてユリウス＝カエサルが2度にわたり侵入したブリテン島は、一般にケルト系のブリトン人と呼ばれる人々が暮らす島だった。皇帝クラウディウス治下43年から始まった征服活動の後、ブリテン島の多くの部分がローマ帝国の支配下に入り、⁽¹⁾皇帝の管轄する属州ブリタニアとなった。島の北部への征服も進み、122年には皇帝（ A ）が来島し、現在のスコットランドとの境界あたりに長城を築かせ、北方の防塁とした。次の皇帝アントニヌス＝ピウスの時代にはさらにその北側に長城が築かれたが、その後もこの地域では北方の諸部族との争いが続いた。208年に皇帝セプティミウス＝セウェルスが2人の息子（ B ）とゲタをともなって来島し体制の立て直しを行ったが、211年にヨークで死去した。父の権力をゲタとともに継承した（ B ）は、その後北方の諸部族を一旦平定し、（ A ）の長城を帝国の境界とした。

辺境の属州ブリタニアでは、軍事支配体制が敷かれ、要所に軍隊の駐屯地として都市が建設されたが、そのほかにもブリトン人の定住地が都市とされたものも多く存在していた。ブリタニアでも、都市は広場・会堂・神殿・劇場・競技場・浴場などローマ都市の基本的要素の多くを維持して建設され、ローマ文化を広める中心となった。これにたいして農村地域では、この時代、ローマ的な大農場ウィッラが多く存在するようになったが、農業活動の中心はブリトン人の小規模な集落であった。この時代に建設された諸都市は、軍事的必要から整備された道路網に接続されていた。諸都市のなかでもロンドンには、港・市場・行政都市としてブリタニア第一の中心地として発展していたため、道路網もこの地を中心に建設されることになった。ローマ時代の道路の多くは、その後長く何らかの形で使用され続け、今もその痕跡を残している。また、現在のイギリスの大都市のひとつ（ C ）のように、ローマの都市や軍隊の駐屯地が現在の都市の遠い起源となっている場合が多く見られる。

5世紀になると、西ローマがゲルマン人の大移動などにより混乱を極めるなか、ブリテン島はローマの支配から離れ、属州としての歴史を終えた。この時期にブリテン島に侵入してきたのがアングロ＝サクソン人と総称されるゲルマン系の人々である。彼らは、後にイングランドと呼ばれる地域を支配するようになり、同地域はやがて七王国に統合された。9世紀には、突然侵入してきたデーン人によりその領域の半分が占領されるが、七王国のひとつ（ D ）の諸王によりデーン人占領地域の再征服が行われ、10世紀のうちにイングランドの統一が確固たるものとされた。その方策は、要所に城塞都市を建設しその周辺領域の支配を確立していくというやり方であった。やがてこのような城塞都市を中心とした州を基礎とした地方組織が形成された。イングランド王国は、11世紀前半に再びデーン人により征服されるが、最終的に（ D ）王家のエドワード証聖王によって継承された。

イングランド王国は、⁽²⁾1066年、ノルマンディー公ウィリアムの侵入をうけ、征服された。いわゆるノルマン＝コンクエストである。この征服の結果、イングランドでは、ノルマン人がアングロ＝サクソン系のイングランド人を支配する体制ができあがった。支配されるイングランド人のほとんどは農民である。征服の結果、領主支配権、領主と農民の支配・被支配の関係が強化され、いわゆる農奴制の進展が見られた。領主たちは、自らが直接保持する領地を荘園として経営した。最も基本的な

形では、領主は、領地を（ E ）と農民保有地に分けた。基本的には、領主は（ E ）での収穫を、農民は農民保有地での収穫を自らの収入としたが、農民は領主にたいしてさまざまな貢租支払いなどの義務を負っていた。実際の村での耕作は、共同で行われるのが一般的であった。主としてイングランド南部・中部・東部では、個々の小規模な農場単位で耕作が行われるのではなく、集村化された村の開放耕地で共同耕作が行われていた。村は、基本的に、中心に教会と農民の家屋敷などが位置し、そのまわりを開放耕地や牧草地や森林共有地が取り囲むような構造をとっていた。開放耕地では（ F ）と呼ばれる農法による輪作が普及し、村人が共有する重量有輪犁を使用して共同で耕作が行われた。

このような農村の景観や農奴身分のあり方は、14世紀中葉から大きく変化した。そのきっかけとなったのは、1348年にイングランドに到達した（ G ）であった。これにより、イングランドの人口の3分の1以上が死亡したと言われており、この急激な人口減少が社会に衝撃を与えたのである。それ以前のイングランドでは、人口増加により農地の不足が問題となっていたが、（ G ）到来の結果、不採算の土地が放棄されたりして廃村となったものが多く見られるようになった。また、人手不足から共同で開放耕地を耕作することが不可能となった場合もあった。こういった状況のなかで領主と農民の力関係が逆転し、農民は、人手を求める領主からよりよい条件で土地を保有することができるようになり、農奴制的拘束から徐々に解放されることになった。しかし、領主自身の手で農村の景観が大きく変えられた場合も多く見られた。人手不足により耕作不可能となった村の開放耕地や共有地を、多くの領主が、あまり労働力を必要としない牧羊を行うために囲い込みを行ったのである。イングランドは古くから良質の羊毛輸出国として知られており、⁽³⁾14世紀後半以降次第に毛織物輸出国へと転換していくが、その発展の背後では、このような囲い込みが進展していたのである。

開放耕地や共有地の囲い込みは、テューダー朝に入っても続き、とりわけ16世紀前半には、アントウェルペンの市場へ向けた毛織物輸出が盛んとなり、その原料となる羊毛生産のための囲い込みが盛んに行われ、多くの農民が村から追われることになった。（ H ）が著書『ユートピア』のなかで「羊が人間を食う」と述べた状況である。しかし、囲い込みは、牧羊のためだけでなく、同時に農業の生産性を改善するためにも行われていた。このような農業改良のための囲い込みが集中的に行われたのは、18世紀後半から19世紀前半にかけてであった。この運動は、新たな農法の開発などもあり、農業生産物の増産を目的として、議会での制定法に擁護されて大規模に進められ、とくにイングランド中部と東部を中心に、開放耕地を中心とした中世以来の農村の景観をほぼ消滅させてしまった。そして、このときに農地から追い出された農民は、新たな労働力の源泉となったのである。

この時期に平行して起こったのが産業革命である。産業革命は、イギリスが獲得した世界的な商業覇権を背景に、大規模な輸出を支えるべく工場での集約的大量生産を可能とするものであった。このような工業化の基礎となったのは、資本家の成長、産業技術の革新、新たな動力の活用であった。まず産業の中心となったのは、北米・カリブ海地域から輸入された綿を使用した綿工業であった。この発展を支えたのが、ハーグリーヴズのジェニー紡績機やクロンプトンの（ I ）などの発明である。その動力も水力から蒸気機関に転換され、生産効率が飛躍的に上昇した。綿工業から始まった技術は、やがて毛織物工業にも適用されるようになった。これと平行して、重工業の発展もみられた。⁽⁴⁾18世紀初頭に木炭ではなく石炭から作られる燃料コークスを使う製鉄技術が開発され、産業用の燃料が石炭

へと転換され、生産量も飛躍的に増加し、鉄がより身近なものとなった。炭鉱では、採掘に蒸気機関が使われるようになり、採炭量も増加した。石炭や鉄などの生産物を運ぶ手段も、変化した。最初の時期の主要な交通手段は道路や運河だったが、1825年に蒸気機関車が（ J ）とダーリントンの間の区間で実用化されると、すぐにイギリス全土を覆う鉄道網が整備され、新たな景観を加えることになった。産業革命期に、工場が集中的に建てられた場所に農村部から追われた農民などが労働者として流入し、イングランド中部・北部を中心に大工業都市が多く発展した。そして、これらの都市を、鉄道が結びつけることになったのである。

大工業都市の発展により、中世以来ほぼ変わることのなかった人口分布が大きく変化した。産業革命によって、社会やそれを取り巻く景観も大きく変化した。たとえば、工業化がとくに進展したイングランド中西部は、工場や炭鉱が集中し大気汚染もともない、⁽⁵⁾「ブラック＝カントリー」と呼ばれるようになった。囲い込みの行われた農村部では、古くからの村落共同体が破壊された場所も少なかった。また、労働者が大量に流入した都市での生活環境・労働環境は良好ではなく、多くの社会問題が生じ、労働者と資本家の間の争いも生じた。このような状況のなかで、やがて産業革命によって新たに生じた問題の解決策を模索する人々も現れた。たとえば、綿工業の中心地である（ C ）の紡績会社で長く働きつつ社会主義の研究をしたエンゲルスは、ロンドンで亡命生活をおくるマルクスに経済援助を行っていた。

設問（１）あるローマの歴史家は、妻の父アグリコラが一時ブリタニアの属州総督を務めていたことから、征服直後のブリタニアの詳細な記述を残している。この歴史家はだれか。

設問（２）この年の10月14日にイングランド南東部で、ノルマンディー公ウィリアムとイングランド王ハロルドの間で決戦が行われ、ウィリアム側が勝利した。この戦いはなんと呼ばれているか。

設問（３）14世紀中葉から1558年まで、イングランドが領有し、羊毛・毛織物輸出の拠点とした大陸の都市はどこか。

設問（４）イングランド北部ヨークシャーの炭鉱地帯に位置し、19世紀に製鉄業で発展した工業都市はどこか。この地は中世の時代から刃物で有名で、チョーサーの『カンタベリ物語』にもここで作られたナイフが登場する。

設問（５）このような産業革命期の変容から離れ、イングランド北部にある風光明媚な湖水地方の自然のなかに居を構え活動したロマン派詩人がいた。彼は、1843年に桂冠詩人となった。この詩人はだれか。

Ⅲ 以下の文章を読み、空欄（ A ）～（ J ）に最も適切な語句やアラビア数字を記入しなさい。

中国には「良い鉄は釘にしない。良い人は兵隊にならない」ということわざがある。このことわざの由来はかなり古い時代にさかのぼる。唐王朝は成年男子に土地を等しく分配する（ A ）を施行し、これと抱き合わせの形で建前上は兵農一致であった府兵制を施行した。しかし（ B ）皇帝の時代、逃亡する農民の増加などが原因で府兵制は崩壊し、代わって傭兵を募集して兵役にあてる募兵制がとりいれられた。しかし兵役に応募する人々は社会のあぶれ者やほみ出し者が多く、軍隊の質は低下した。毛沢東が1927年に湖南省と江西省の境界にある（ C ）のふもとに最初の革命根拠地を作った時、その直前に兵士の規律を定めた「三大規律・六項注意」を出した。「六項」はのちに「八項」となり、その中身も時に応じて変化があるが、その内容を一瞥してみると、「農民のものは奪わない」「借りたものは返す」といったいわば当たり前の事項で埋め尽くされている。こうした規律を反転させたものが、伝統中国における軍隊の実態であったと言えるだろう。募兵制は唐代以降、必ずしも歴代王朝すべてが採用した制度ではなかったが、それでも兵士を充足するための一つの常套的な手段となったことは間違いない。

時代は下り、清代の正規兵は、八旗および警察に近い業務を行う（ D ）で構成されていた。康熙・雍正・乾隆帝の盛世をへて、清朝は次第に衰亡への道を歩み始める。18世紀の前半まではほとんど見られなかった暴動が、18世紀の後半になると姿を現し始め、世紀末には頻発するようになる。その代表が白蓮教徒の乱であった。この反乱と、（ E ）を指導者とする太平天国の乱にあたり、清朝の正規軍はその腐敗・墮落によって、ほとんど反乱を鎮圧する力を発揮できないありさまであった。代わって反乱の平定にあずかって力のあったのが、清朝の重鎮や地元の有力者によって彼らの郷里で採用された軍隊である。彼らは郷勇と呼ばれ、李鴻章が組織した（ F ）などがその代表として挙げられる。郷勇は李鴻章らが自分たちで組織し、自分たちで資金を集め、自分たちで訓練した軍隊であるから、いきおい彼らの私兵という性格を強く持つことになった。この軍隊は太平天国軍討伐の主役であり続け、1864年には太平天国が首都とさだめた天京を落として、反乱を平定した。太平天国の乱にあたり、軍事上の観点から注目すべきことは他にもある。それは反乱の鎮圧にあたって欧米人が関わりを持ったことである。太平天国軍が上海に迫った時、上海にいた中国人の富裕階級や欧米人は、欧米人に上海の防衛を依頼した。アメリカ人のウードはこれに応じて外国人部隊を組織したが、これを改組して中国人兵士を徴募し、その指揮官ものちにイギリス人（ G ）に替わった。この軍隊を常勝軍という。

太平天国の乱を鎮圧するため、李鴻章らは西洋の技術を取り入れて軍需工場の建設・鉄道の敷設・鉱山の開発などに着手した。こうした施策は1860年代にはじまりおおむね1890年代まで持続するが、その核心は国を富ませることと同時に軍事力の強化を図ることにあった。これは洋務運動と呼ばれるが、軍事力の強化は、李鴻章らがほぼ私兵の形で擁する軍隊を強化することに他ならなかった。1894年にはじまる日清戦争で日本軍に対峙した清国の軍隊も、北洋艦隊をはじめとしてその主力は李鴻章子飼いの集団と言ってもよい。この李鴻章の私兵的軍隊を継承したのが袁世凱である。袁世凱は、（ F ）の勇将の一人であった呉長慶のもとにはせ参じたのが、彼を李鴻章に結びつける契機となった。

袁世凱は幼いころから科挙を目指して勉強したが、挙人には合格したものの、進士には手が届かず、軍隊で実績を積むことによって中央政界にデビューを果たしたのである。この袁世凱の軍事力が大いに政局に影響を与えたのが1898年の戊戌の政変であった。日清戦争の敗北を契機として、清朝の体制を維持しながらも、国会開設や憲法制定など、その制度の抜本的な改革を主張する康有為が台頭した。彼は立憲君主制の実現を目指して皇帝（ H ）を動かし、政治の改革に着手したが、官界における豊富な政治経験を持たない彼の施策は順調に進まなかった。康有為は遂に、改革の行く手に立ちふさがる西太后の腹心である栄禄の殺害を、彼の同志である譚嗣同を通じて袁世凱に持ちかけた。袁世凱はこの計画を栄禄に漏らし、栄禄から事の次第について報告を受けた西太后はただちに（ H ）を幽閉し、譚嗣同を処刑した。失脚した康有為も日本への亡命を余儀なくされた。この戊戌の政変に際し、クーデタのキャスティングボートを握ったのが、圧倒的な軍事力を誇る袁世凱であったことは注目されてよい。1911年の辛亥革命の時に、孫文側が清朝を倒しはしたものの、臨時大總統の地位を袁世凱に譲り渡さざるを得なかったのも、袁世凱には自分を支える軍隊があったのに対し、孫文は結局自前の革命軍を持っていなかったからに他ならない。袁世凱はその後帝政の復活を企図するが激しい反対にあい、失意のうちに病死した。

袁世凱の死後、中国は軍閥の混戦する状況におちいるが、こうした情勢に終止符をうったのが、蒋介石の北伐である。蒋介石の北伐軍は北京を制圧し、東北地方に割拠する（ I ）が蒋介石の国民党に帰順したため、ここに一応の統一が達成された。その後、日中戦争の終結をへて共産党と国民党との間で雌雄を決する戦いが始まり、1949年にこの争いに敗れた蒋介石は台湾に逃れ、毛沢東は北京で中華人民共和国の成立を宣言した。中華人民共和国の時代になっても、軍は政治のなかで重要な位置を占め続けた。1966年に毛沢東がプロレタリア文化大革命を発動した時も、彼のそのような行動が可能となったのは、軍の支持を取り付けたからであった。文化大革命の終結後、共産党は改革・開放路線に舵を切ったが、急激な社会の変化によって世の中の不安が高まるなかで、（ J ）年には民主化を要求する学生たちが北京の天安門広場に集結してデモを繰り広げた。共産党はこれを武力で鎮圧し、学生側は多数の死者を出した。ここにおいて人民解放軍は、共産党の軍隊であり、決して人民の軍隊ではないことを白日のもとにさらすことになった。軍と党との関係は今後深まりこそすれ、決して薄くなることはないであろう。将来の中国の行方についても、軍隊はその筋道に、かつての中国がそうであったように大きな影を落とし続けるものと思われる。

IV 以下の文章を読み、空欄（ A ）～（ J ）に最も適切な語句やアラビア数字を記入しなさい。

アムステルダムは、運河沿いに並ぶ切妻屋根の美しい建物と、近世黄金時代の繁栄を今に伝える絵画などの芸術遺産が、世界中から多くの観光客を集める町である。中世初期までは低地地方（ネーデルラント）の湖沼地帯の一漁村であったのが、海面の上昇により北海に通じる内海、ザイデル海が成立したことから、ザイデル海に面した港町へと発展した。すると商人たちは穀物や木材をバルト海域から輸入し、船乗りたちは北海に乗り出した。遠洋漁業によって培われた海を恐れない水夫と、すぐれた船舶建造技術は、のちに海運王国オランダの発展を支えることになる。14世紀半ばにニシンの貯蔵法が開発されると、樽に詰められた塩漬けニシンは広くイギリスやフランス、南欧にまで輸出されるようになった。その頃ハンブルクなどハンザ都市の商品を流通させる市場として力をつけたアムステルダムは、次第にハンザ都市と競うようになり、16世紀にはヨーロッパ経済の中心に躍り出たアントウェルペンの長距離海上輸送を担って、穀物の不足する（ A ）半島にバルト海域の穀物を大量に輸送した。

中世の低地地方には伯領や公国、司教領などが散在していたが、14世紀後半からフランス東部に本拠を持つブルゴーニュ公国がこの地に領土を拡大した。その領土にはブリュッセルやアントウェルペンなどの商業都市や、ブルッヘや（ B ）などの毛織物業で栄えた都市が含まれた。その頃の経済の中心は南部フランドル地方で、（ B ）の人口は5万を超えていたのに対して、アムステルダムは8千人程度にとどまった。1477年に同公国のシャルル突進公が戦死し、遺されたマリーがハプスブルク家の（ C ）と結婚したことから、低地地方はハプスブルク家の所領となった。（ C ）とマリーの孫で（ B ）で生まれたカールは、南イタリアから南北アメリカにまで広がる領地を手中にしながら、政治・軍事・金融の拠点としての低地地方を重視し続けたが、カトリック教会の保護者としての立場を堅持したため、同地は否応無く宗教戦争の渦中に投げこまれた。神聖ローマ皇帝となったカールは1521年に（ D ）の帝国議会で自説を撤回しないルターを追放し、スペインの制度を模した異端審問を低地地方にも導入した。その子フェリペ2世は父の政策をより厳格に実施して同地のプロテスタントを迫害し、集権化を強めて新税を導入したため、不満を持ったカルヴァン派の下級貴族や商工業者らは、（ E ）年、オラニエ公ウィレムを指導者としてスペインの支配に反旗を翻した。80年におよぶ戦争の始まりである。

アムステルダムが世界経済の中心へと躍り出るきっかけとなったのは、まさにこの戦争の進展の過程で、1578年にカトリックの市政府を追放し、北部反乱側の中心都市となったことによった。翌年、（ F ）やゼーラントを中心とした北部7州はユトレヒト同盟を結び、戦争の継続を誓った。1585年にアントウェルペンが破壊略奪の末にスペイン軍の手に陥落すると、何千人ものプロテスタント市民が北部に脱出した。その中には有力商人や毛織物業などの手工業者、芸術家たちが含まれていた。商業都市アムステルダムは、プロテスタント諸派にとどまらず、カトリック教徒やユダヤ教徒にも広く門戸を開き、多くの移住者を受け入れた。同時期に（ A ）半島から逃れてきた改宗ユダヤ教徒も同地に移住し、ここを中心として国際的なネットワークを構築していった。

こうして新たに流入した商人や手工業者がもたらした資本、技術、ネットワークを活かし、アムステルダムを中心としたオランダ諸都市は、バルト海・北海にとどまらず、アジア、アフリカ、南北

アメリカへとその交易網を広げていった。当時スペインに併合されていたポルトガルに対抗してアジアでの香辛料貿易を行うため、1602年には「オランダ東インド会社」が設立された。同社はジャワ島西部のジャカルタを占拠して（ G ）と名付け、そこを拠点として台湾、マラッカ、スリランカを占領し、日本との間にも独占交易を行った。こうして、胡椒・ナツメグ・クローブ・シナモンなど香辛料市場での支配的地位を確立し、1679年にはジャワ島東部の（ H ）王国を属国化するなど、一帯の植民地支配を強化した。彼らは香辛料だけでなく、中国の陶磁器や生糸や絹織物、インドの更紗など、多くの東洋の文物をヨーロッパにもたらし、明朝末期の混乱で対中国交易が滞ると、日本の柿右衛門や伊万里の染付などを買い上げた。中国や日本の陶磁器へのヨーロッパの熱狂は、オランダにこれらを真似た窯業を発展させた。町の名を冠した鮮やかなブルーの絵付けで知られるデルフト焼はその一例である。

大西洋をこえた南北アメリカに対しても、1621年に「オランダ西インド会社」を設立してスペイン・ポルトガルの覇権への攻撃を行ったが、スペイン帝国の資金源となっていた南アメリカからの財宝を奪うことを主たる目的とし、海賊や私掠行為によりスペインやポルトガルの船団から積荷を奪ったり、交易拠点を設けて密貿易を行ったりといったやり方が主流であった。カリブ海はまるでオランダの海のようにであったと言われる。オランダは、コストのかかる植民やプランテーション経営よりも、自由な貿易を求めて成功した。ただしその中で、初期にはタバコ、のちにはサトウキビの栽培地として魅力的であったスリナム（オランダ領ギアナ）だけは例外で、第2次英蘭戦争後のブレダ条約により、ニューアムステルダム、のちの（ I ）との交換で、領有権を獲得した。奴隷を労働力とするプランテーションでのサトウキビ栽培に加えて、奴隷をアフリカ西岸からカリブ海域・ブラジルへ、砂糖をヨーロッパへ、繊維製品や雑貨・武器などのヨーロッパ産品をアフリカへと運ぶ三角貿易は、大きな富をオランダにもたらした。

このように世界的な中継貿易で繁栄したオランダは、1609年にスペインとの12年停戦協定を結んだ頃には、実質的には独立国家となっていた。文化的寛容と対外交易による繁栄、また東西植民地からの文物は、17世紀オランダに独自の市民的な芸術を開花させた。それまでの宮廷や貴族や教会のための絵画にかわり、経済力をつけた市民のための絵画が量産され、アムステルダムのような都市には、ギルドの親方の下で消費財としての絵画を製作する工房が生まれた。アムステルダムで活躍した画家レンブラントの代表作で、ニスの黒ずみによって誤って「（ J ）」と通称されるようになった「フランス・バニング・コック隊長とウィレム・ファン・ライテンブルフ副隊長の火縄銃手組合」は、市民によって組織された自警団の集団肖像画であり、そこには都市を守る市民の自負がダイナミックに描かれている。レンブラントに肖像画を依頼するような有力な市民や団体だけでなく、職人や農民にも絵画を所有する慣習が広がり、日常生活の様子にスポットライトをあてた「風俗画」と呼ばれる独自のジャンルが流行した。デルフト出身のフェルメールは、このジャンルで優れた作品を残した画家として知られる。同じ時期のスペイン黄金世紀の絵画が、宮廷画家ベラスケスによる王家の人々や宮廷人の肖像画や、ムリリョの柔らかな色彩の聖母像などの宗教画に代表されるのと比べると、きわめて対照的である。